

■自由投稿

発達障害のあるヴァイオリニストと 共に歩んできた人々の記録

三浦美恵子 (国際医療福祉大学)

1 はじめに

本研究の目的は、近年増加傾向が示されている発達障害¹⁾の人々に対する療育・支援・指導の在り方について知見を得ることである。特に、発達障害を持つ人々の強み(好き・得意なこと・長所など)を尊重し伸ばすために、親や教師など周囲の人々はどのように関わればよいものだろうか。

本稿では、発達障害のあるヴァイオリニスト廣澤大介氏に注目し、同氏と共に歩んだ人々(計6名)の事例から示唆を得る。廣澤大介氏(1981年生まれ、現在41歳・大阪府在住)は、7歳からヴァイオリンを習い始め、2001年ポerlandで開催された「エドヴィン・コヴァーリック記念障害者のための国際音楽フェスティバル」で特別賞を受賞、2006年25歳の時にプロのヴァイオリニストとしてデビューした人物である。

同氏は、幼少期から軽い知的障害と広汎性発達障害があり(測定時のIQは52)、20年以上に渡り「学習障害」があると思われていたが、2009年(当時28歳)には「広汎性発達障害に含まれる自閉症で、サヴァンの傾向²⁾が強い」という診断が下された。2016年以降、幾つかの病気を併発し、二度に渡る脳の手術を行った。現在も闘病中で、日々治療とリハビリに励み、

活動の再開を目指している。

2 方法

廣澤大介氏については、以下3つを情報源とし、生後から現在の様子について詳述した。①新聞記事(新聞うずみ火、2008年2月号pp.2-5)、②テレビ番組(関西テレビ2009年12月15日放送「発達障害のヴァイオリニスト」)、③DAISUKE通信(廣澤大介ファンクラブが2001～2016年に発行したニュースター No.1-26)。

また、廣澤氏と共に歩んできた人々として、以下①-③の計6名にインタビュー調査を実施した。①母親、廣澤大介ファンクラブ会長(2021年10月25日、2名同時に約3時間)、②廣澤氏が中学生時代に通ったフリースクール主宰者(2021年11月10日、約3時間)、③3名のヴァイオリン指導者(2021年11月23-24日、1名ずつ各3時間)。

これらをもとに、療育・支援・指導の具体的な内容について詳述し、その共通点について、何らかの障害と優れた才能を併せ持つ人々を意味する2E(Twice-Exceptional)の観点を含め、検討・考察した。全ての調査協力者(計7名)から、実名使用、資料・インタビューの内容を研究成果として発表することについて承諾を得

1) 発達障害は、発達障害者支援法(2005年4月1日施行)の第二条で、「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能障害であり、その症状が通常低年齢で発現するもの」と定義される。

2) 楊・井澤(2017, p.167)は、サヴァン症候群(savant syndrome)を「知的障害、自閉症などの発達障害等のある人が、その障害とは対照的に優れた能力・偉才を示すこと。たとえば、ある特定の分野の記憶力、芸術、計算などに、高い能力を有する人」と述べている。

ている。

3 廣澤氏に関する記録

3.1 生後～小学校

母親が廣澤氏の発育の遅れに気づいたのは、生後8ヵ月頃であった。表情が乏しく、運動機能が鈍かった。刺激に対して極端に反応が鈍く、蛍光灯を1時間見続けて楽しそうにするなど他の子どもとは異なる様子が見られた。歩けるようになったのは1歳8ヵ月だった。

一方で、廣澤氏は音に対する興味が強く、2歳でピアノに近づいて音を探り、3歳になると一度聞いた曲をすぐに覚え、ピアノで音を辿れるようになっていた。母親は発育に役立つのではないかと、とすがる思いで楽器を習わせた。視覚過敏のためか音符の区別ができず、ピアノ教師からは楽譜が読めなければ無理と断られたが、友人のヴァイオリニストが声をかけてくれた。

小学校入学時、母親は校長に事情を説明したが「自分の名前を言えて、5つまで数えられるなら大丈夫。遅いというのも個性ですから」と意に介さなかった。廣澤氏は複雑なことを理解したり、運動したりすることが苦手であり、自転車に乗れるようになるまでには約3年かかった。

知的障害の程度が軽いため、当時の養護学級には入れてもらえず、普通学級ではどの授業にもついていけなかった。分数ができない、九九が覚えられない、文字は左右を反対に書く(鏡文字)ことが克服できず、いじめられることの連続だった。

なかなかうまくいきづらかった、ほとんどの人と。友達ができなかった。楽しかった、というのがないです。(廣澤氏、テレビ番組)

修学旅行の班分けでも、大介を誰も取りたがらない。クラスの男の子から「お前はアホか

普通かどっちや」と言われて帰ってきて、「僕はアホと違う」と……。感じる心があるだけに辛かったと思います。(母、新聞記事, p. 2)

専門家による診断を重ね、学習障害ではないかと考えた母は、学校や教育委員会を何度も訪ね、廣澤氏の発達に合わせた教育をしてほしいと訴えた。しかし、子どもがきちんと学校で勉強できないのは親の責任、教員は仕事が山積みで廣澤氏一人に手をかけていられないなど、関係者の反応は冷たいものであった。

高学年になるとますます状況は難しくなり、廣澤氏は授業についていけず、迷惑にならないよう教室の隅で黙って座るしかなかった。母は、忙しくしている小学校の先生に「1日3分間だけ、大介何してるかなあと見てやって下さい」と具体的な要求をした。

3.2 中学校

中学生になり、上手くできない様子を見た母が廣澤氏に「なんでできへんの」ときつくあたった時、彼は、「ごめんね、できない」と言ってニコッと笑った。

その純粋な笑顔を見た時、ガーンと打ちのめされたように感じました。「人並み」という自分が考えた枠の中に入れようとしていただけではなかったか。この子の優しさ、清らかな心をきちんと評価できる人間にならなければならぬと思うようになったのです。(母、新聞記事, p. 3)

学習のサポートを学校任せには出来ないことを実感した母は、フリースクールの主宰者と出会い、中学入学後も週4日通わせた。そのフリースクールは、自宅から電車で約4回乗り換えなければならぬほど遠かったが、廣澤氏は6年間、毎日4時間自転車に乗って通学した。そこでは、「早くしなさい」「ここまでできるように

ならないとダメ」という指導はなく、個々の発達に合わせた教育が行われていたため、廣澤氏に合っていたようである。廣澤氏の変化について、中学校の教員は次のように述べた。

大ちゃんがあんなに輝いている。ショックでした。悔しいけれど学校ではあの表情はない。(中学1年時の担任、新聞記事, p. 3)

フリースクールに加えて、廣澤氏の表情をさらに輝かせたものは音楽である。廣澤氏が7歳の時に、左脳の訓練とリハビリのためにヴァイオリンを開始し、学校では集中力が5分も持たなかったが、ヴァイオリンでは10-30分と持続できるようになった。

3.3 定時制高校

クラス内の人数が少なく、4年制であるため、先生も時間をかけて教えてくれるだろうと考えて定時制高校に進学した。幅広い年齢層の人々が集まる定時制の雰囲気、廣澤氏を救った。辛いことばかりの学校生活だったが、定時制高校の進学が転機となったのである。

定時制高校では、自分のペースに合わせた教育を受けることができ、学ぶことの楽しさを感じたと同時に、音楽の腕も上がった。楽譜が読めなかった廣澤氏のレッスンは一筋縄ではいかなかったが、廣澤氏の良さを引き出してくれる指導者との出会いがあり、楽譜が読めるようになった。廣澤氏は、ヴァイオリンの個人レッスンを受け始めてから、楽譜が読めるようになるまで7年の歳月を要したが、ヴァイオリンで《ツイゴイネルワイゼン》を弾けるまでに上達したのである。

大介君は定時制の高校に通うようになり、学校生活を楽しめるようになると、また音色が変わってきました。一音一音に気持ちを込めて、丁寧に出すようになっていました。口下

手の大介君の思いを代弁するかのよう、喜びや切なさをヴァイオリンが語っていました。(DAISUKE通信2010年8月号, No.12, pp. 1-2)

定時制高校では、成績も先生方が「驚異」と唸るほどに伸び、所属した演劇部ではヴァイオリンを活かし、生徒会の役員にも立候補するなど積極的になった。以下は、廣澤氏の高校時代を知る教員の言葉である。

図書館に集まってくる優しすぎる不思議な仲間(小中学時代不登校の生徒)と共に、教員として私も一緒に彼の自己実現に参加しました。大介さんが「コンサートがしたい!」と言えばコンサートを、「お芝居がしたい!」と言えば大きな体で演劇もしましたね。(中略)この中から多くの仲間との出会いがありました。それがヴァイオリニスト大介さんの一角を作っています。(元天王寺高校定時制教員, DAISUKE通信2008年8月号, No. 6, p. 6)

3.4 大学～プロデビュー

音楽系の大学ではないが、廣澤氏は大学へ進学し卒業を果たした。大学では講義の合間に空き教室を使わせてもらい、1日5-7時間ヴァイオリンの練習に打ち込んだ。

ある年の夏休みに、大学の廊下を歩いているとヴァイオリンの音色が聞こえてきました。誰かなと思って教室の中をうかがうと、大介さんです。声をかけるのが憚られるような気迫がこもっていました。自宅で練習をすると、音が近所の迷惑になるので、片道2時間かけて大学まで来ていたのでした。(大学教員, DAISUKE通信2016年8月号, No. 26, p. 1)

2001年大学在学中に、ポーランドで開催された障害者のための国際音楽フェスティバルに

参加し、ドボルザークの《ソナチネ》を演奏した。ショパン音楽アカデミーで教鞭をとる審査委員長から、「存在そのものが楽器であり音楽である」と絶賛され、ただ一人特別賞を受賞した。その後、2006年にプロとしてデビューした。

3.5 障害の診断変更～現在の闘病生活

2009年に開催された4回目の定期演奏会には、300人の聴衆が集まった。ドボルザークの《4つのロマンティックな小品》に加えて、《ロンドンデリーの歌》、《見上げてごらん夜の星を》などを披露した。特に《見上げてごらん夜の星を》は、定時制高校のテーマソングであり、音楽と共に生きると決めた廣澤氏にとって原点となる一曲である。

また2009年（28歳）は、廣澤氏の病名が変更された年でもあった。半年に渡る精神科医による検査の結果、「学習障害」から「広汎性発達障害に含まれる自閉症で、サヴァンの傾向が強い」という診断が下された。その時のことについて母は次のように述べている。

広汎性発達障害に含まれる自閉症で、サヴァンの傾向が強いというのが正式の名称です。ところが、そんな病名がつけましたのは1年半前で、何と20数年間、学習障害だと思っていました。学習障害というのは、だいたい普通の能力なんだけど、読んだり、書いたり、計算したりする部分がちょっと人より遅れている。恐らくそれでしょうと専門家がおっしゃるので、親もそう思っていました。（DAISUKE通信2011年9月号, No. 15, p. 4）

2016年から「局所ジストニア」（音楽家に多く、演奏運動のような特定の動作を過剰に反復することによって神経伝達機能に問題が生じ、筋肉が硬直して楽器が弾けなくなる）と「遅発性ジスキネジア」（高次機能障害のために処方されていた薬の副作用による）が併発し、現在

も闘病中である。2019年には脳手術を2回行い、廣澤氏が再びヴァイオリンを弾けるようになるにはまだ時間が必要だが、本人は絶対に病気を治し、ヴァイオリニストとして活動を再開することを決意している。

4 廣澤氏と歩んできた人々の記録

4.1 母親、フリースクール主催者、ファンクラブ会長

4.1.1 母親：稲光宏子氏

稲光宏子氏は、廣澤氏の療育について、局所的な能力開花に集中するというよりも、「様々な生きる力」を励まし育てること、「得手（えて）を伸ばす」ことにより自己実現の力を養うことを重視し、困難があってもこれらを車の両輪のように追求してきたと言う。乳児期に全身の発達遅滞があった廣澤氏に対し、感覚、情緒、知的関心、好奇心を促す働きかけに加えて、肢体不自由に関わる運動機能を促すマッサージや訓練を並行して行った。子どもの発達について、親である自分がしっかり学ぶことが不可欠だと考え、関係書籍の熟読、各地の先進的な障害児教育の取り組みについて取材・学習し、ユニークな実践を行う教育機関の見学などを行った。

また、どんなに時間がかかっても育ちの力を信頼し「伸びない子はいない」という考え方を基本としてきた。これまで多くの人々、例えば、子どものための臨床心理士、小児科医、保育士、学童保育の先生方、7歳の時から現在に至るまでずっと関わって下さっている方、長い間学習支援を行い、得手を伸ばす上で、フリースクールの先生、定時制高校の先生方、音楽・ヴァイオリンの指導者たちが重要な役割を果たしたと述べている。さらに、廣澤大介ファンクラブの存在も欠かすことができず、一人の障害を持つ人間の成長と、音楽家としての道を歩み始める直接的なきっかけを作ってくれた。

障害を持つ子どもを育てる上で大切なことや、難しいことについては、始めから好意的な人ばかりではないので、理解してもらい、関わってもらえるように働きかけることが必要だと考えている。教育者とは言え、学校の先生は多忙であり、手のかかる子どもに関わってられない状況がある。しかし、息子の存在を理解してもらえるように工夫し、親としてお願いすること、働きかけることを諦めずに続けた（1日3分だけでいいので、大介のことを見て欲しいと頼むなど）。その結果、「勉強は遅れがあるけれど、学校でヴァイオリンを弾く大ちゃん」が認められるようになった。こうした努力は目立たないけれど、障害を持つ子どもたちが生きるためにとても大事なことだと考えている。

また、適切な医療や専門家に繋がること自体が容易ではなく、医療の専門家同士の連携などは、未だに十分ではない。そして、専門家の診断については、母親曰く「半分本当で、半分うそだ」と思うことがあり、専門家の育成と適切な医療にアクセスできる環境整備が急務であると述べている。

4.1.2 フリースクールの主宰者：石井守氏

石井守氏は、教員として働いた後、1989年50歳の時に学校を退職し、大阪でフリースクール（不登校・引きこもり青年などの自立支援を目的）を開設した。約30年前、小学3年生の廣澤氏に出会い、最初の2年間は自宅を訪問して勉強を教えた。廣澤氏がフリースクールに通学したのは実質3年くらいだったが、高校卒業後もフリースクールに遊びに来ていた。廣澤氏は優しくて人の話をよく聞くタイプの子供だったと言う。

石井氏は、廣澤氏に限らず、発達障害や知的障害の人々については、他の人とは異なるその人なりの優れた能力があると昔から感じていたと言う。しかし、子どもの能力や良い部分を見つけることは難しい場合があり、それらは長い

時間を一緒に過ごさないと発見できないものである。また、誰でも知的な部分があるが、学校では勉強する量が多すぎて、学習能力がある子どもでも落ちこぼれになってしまうことがある。廣澤氏の指導で心掛けたこととして、この子に出来ること、必要なことは何かを考え、覚えることを減らし絞って指導すること、そして「絶対に勉強嫌いにならない」ことを決意していたと述べている。

例えば算数の場合、何でもかんでもやろうとせず、まずは足し算に取り組み、楽しく勉強できるようにした。本人の考え方があるので、それに従いながら、学習内容を要領よく覚える方法を一緒に考えた。また、言葉で表現することや意見を主張することが苦手なタイプだったので、本人の気持ちや言いたいことを引き出すにはどうしたらよいか意識し、スタッフとの決め事として、廣澤氏が嫌そうな表情をした時は、継続せずにすぐ止めることにしていた。

石井氏は、廣澤氏の高校進学については、本人の性格や入手していた定時制高校の情報等を検討し、天王寺高校の定時制を勧めた。その定時制高校には親身になって指導してくれそうな教員がいたり、元引きこもりの生徒が石井氏主催のフリースクールからそこに進学したりしていたため、先生や友達の様子を聞いて情報を収集していた。廣澤氏は天王寺高校の定時制に進学したが、結果的にとても楽しく、充実した日々を過ごしたようで本当によかったと語っている。

石井氏は教員生活を28年、その後フリースクール等の活動を30年以上続けているが、人や場面によって最適な方法は異なるので、万能な支援方法のようなものはないと感じている。しかし、この人がどうしたら元気になるかということをよく考えることは不可欠である。とりわけ発達障害の人々に対しては、短期的な支援ではなく長期的な支援が必要である。支援する・される側が経済的な問題などに左右されることなく、各自の必要に応じて、継続的に助け

合うことができるような社会作りが不可欠だと考えている。

4.1.3 ファンクラブ会長：梅本哲世氏

廣澤大介ファンクラブの会長を務める梅本哲世氏は、もともとクラシック音楽が好きでよく聴いている。技術的に上手くても感動しない場合もあるが、廣澤氏の演奏を聴いた時、技術的に足りないところがあったとしても、ピュアな人間性が現れているところに感動したと言う。また、一般的に、音楽家は経済的に恵まれた家庭に生まれ育った人々が多いが、一部の人が音楽を学び技術を磨くのではなく、障害の有無や経済の事情などを超えて、皆が平等に音楽を楽しむ機会が広く行き渡って欲しいと願っており、その実現も廣澤大介ファンクラブが目指す目標の一つだと言う。以下に同氏の言葉を引用する。

一人のファンとして廣澤大介ファンクラブは、2006年11月24日に発足しました。大介さんの音楽に感動した有志が、大介さんを励まし支えるとともに、もっと多くの方々に大介さんのヴァイオリンを聴いて頂きたいという趣旨で立ち上げたものです。私は、大介さんの演奏、特にモーツァルトを聴いて、そのすばらしさに心から感動しました。大介さんのヴァイオリンは、現在の日本の若手ヴァイオリニストの多くに見られる技術偏重で無機質な演奏とは全く異なった、純粋で人間的な暖かさをもっています。大介さんのさらなる成長を期待し、応援を続けていきたいと思っています。(廣澤大介ホームページより)

4.2 音楽・ヴァイオリン指導者たち

4.2.1 松野迅氏

松野迅氏は、廣澤氏がヴァイオリンと出会うきっかけを作り、2001年ポーランドで開催された「障がいをもつ音楽家たちの国際フェス

ティバル」への参加を含め、30年以上前から廣澤氏の成長を見守ってきた人物である。1989年4月、当時7歳の廣澤氏は、松野氏の関係者にピアノを習い始めた。廣澤氏は、右手だけあるいは左手だけであれば一つのハーモニーやリズムを追うことに無理はなかったが、複数の要素を同時に行うことに苦労を抱えていた。また、直前に演奏した内容を覚えることにも苦労していた。

松野氏は、学習障害と言われていた廣澤氏について理解するため、関連書籍を読む、母親にアドバイスを求める、専門家や同じような子どもを持つ親の話聞くなどして、懸命に勉強した。廣澤氏の指導で意識したこととして、到達点を決め、それに向かっていく目的型あるいは成果主義的な教え方・学び方ではなく、一つのことができるようになったら次へ進めることにした。例えば、廣澤氏は記憶することが苦手であったため、同じことを何度も繰り返し、できたら次に進む、右手ができれば左手の練習を行うなど、一つ一つ丁寧に向き合うことを指導者に指示した。

また、演奏を習得する際には、できる限り廣澤氏に松野氏の生演奏を聴いてもらうようにし、CDなどに録音された、変化のない音源を繰り返し使用することは避けた。さらに、廣澤氏がどのように日々を過ごしているのか、生活背景を知ること大切だと考え、前述のフリースクールの主宰者であった石井氏と連絡を取り、スクールでの様子等について情報収集を行った。

松野氏は、自分は「教師」、学ぶ人々は「生徒」と考えたことは一度もなく、共に音楽を学ぶ「パフォーマー」だと考えている。よって、音楽を学ぶ人々には、演奏家として必ずコンサートに参加してもらうことにしている。松野氏は、1984年から毎年8月、長野県にて「室内楽inn」という音楽祭を2日間に渡って開催しており、廣澤氏は高校時代から20代まで継続して参加し、ヴァイオリンを演奏した(2018

年は33回目の実施となった)。

このコンサートの1日目はプロの演奏、2日目は年齢や障害の有無を問わずさまざまな人々が参加するというプログラムになっており、プロやアマチュアの区別なくアンサンブルと一緒に演奏するなど、ボーダレスな顔ぶれによる音楽作りを目的としている。また、廣澤氏は2001年、ポーランドで開催された「エドヴィン・コヴァーリック記念障害者のための国際音楽フェスティバル」に参加を果たした。

松野氏が、指導者として最も大切だと思うことは謙虚さであり、全ての人間や楽曲に対して忘れてはならない姿勢だと考えている。この方法で良いのか、なぜこのような結果になったのかなど、自身の思い込みや前例を忘れて人に向き合うことが大切であり、そうしないと見えてこないものがあると言う。

また、海外でも音楽活動を行ってきた経験から、弱い立場の人々がどのように扱われ、守られているかがその国の状態を反映する一つの尺度になると考えている。障害という言葉がなくなることが理想であると同時に、廣澤氏は特殊な事例と捉えざるを得ないとしたそれは社会の問題である。廣澤氏には良い先生がついているから、自分には支援者がおらず廣澤氏とは違うから……というような考え方で終わるのではなく、互いに協力してより良い社会作りを目指し自らも参加する姿勢が必要ではないだろうか、と松野氏は問いかける。皆が生命体として同じという意味では、人種の違いや障害の有無は関係なく、お互いに守り合うべき存在である。演奏家である前に一市民であり、音楽を通して自分が目指す社会作りを実践していきたいと考えている。

4.2.2 菊本恭子氏

菊本恭子氏は、廣澤氏が10歳から大学2年生まで、そして2016年以降、幾つかの病気を併発してから現在に至るまで、指導に携わる人

物である。約30年前、前述の松野氏から依頼を受け、廣澤氏と出会うことになった。当時の菊本氏にとって、ヴァイオリンを指導したのは廣澤氏が初めてであり、手探りだった反面、だからこそ決めつけることなく一緒に歩むことができたかもしれないと述べている。

当時の廣澤氏は不器用だったが、努力家で粘り強く、真面目、音楽への情熱が感じられたと言う。少しずつしかできなかつたので、同じことを何回も伝え、通常の3倍くらいの時間をかけて教えた。また、廣澤氏は発達障害の特性により、予定の変更が苦手であった。例えば、都合によりレッスン日がいつもの曜日から別の曜日に変更された場合、対応することが困難だったため、レッスン日の変更はできなかつた。

菊本氏は、相手が子どもか大人か、障害の有無などに関係なく、音楽を愛する者として接することが大切であり、相手から学ぶことはたくさんあると言う。皆同じ人間であり、出来ること、出来ないことは誰にでもある。昨日より少し上手になれば生きている証である。障害は個性であり、音楽は誰でも楽しむことができ、正解がなく色々あってよいので一生続ける価値があると考えている。

また、出来ない・無理と考えるのではなく、出来る信じ、出来るまでとにかく一緒に練習する。「出来ないの？」ではなく、時間をかければ必ず出来る信じ、試行錯誤し悩みながら、その人にとって何が一番いいのか常に考えるようにしている。障害がある場合、その特性などについて保護者とよくコンタクトをとり(障害がない子どもより頻度は多くなる)、興味を持ってよく知るようにし、本人との信頼関係を築くことを何よりも大切にしている。さらに、本人が自分で答えを見つけて取り組むことができるようにするため、指導者には辛抱強く待つ態度(待ち方は色々ある)が不可欠であると考えている。

廣澤氏は、プロデビュー後しばらくしてから、

病気のため半年間入院し、5年間ヴァイオリンを弾くことができなかった。そのような状態で改めて菊本氏に指導を依頼したところ、同氏は迷うことなく引き受け、現在に至る。廣澤氏が5年振りにヴァイオリンを弾いた時は「ギー」という音しか出ず、全く弾けない状態だったが、菊本氏は一から指導を始めた。その理由は、廣澤氏のヴァイオリンを弾きたい気持ち、ヴァイオリンが好きな気持ちは昔と変わらず、自分たちはヴァイオリンで結び付いていると考えているからである。二人にとって、ヴァイオリンは自分の命と同じくらい大切なもので、本当に愛しているという点で共通していると言う。

現在の廣澤氏は、かつて指導していた小学校から大学生の時とは、明らかに体格や筋肉が変化している。また、かつては時間をかければ出来たことも、今は病気ゆえに体力や集中力などの面で難しい状況もあるが、試行錯誤を重ね、良い時も悪い時もヴァイオリンを愛する仲間としての歩みを続けている。

また、廣澤氏自身、言葉でコミュニケーションをとることが苦手だと思っているかもしれない。しかし彼は、とても優しく、人への気遣いが良くでき、人の心に寄り添う人物であり、人に喜んでもらいたい、人のために頑張りたいという気持ちが強い。ヴァイオリンに対する使命感のようなものを持っており、音楽によって人と繋がる力があると感じている。廣澤氏が奏でる音は、邪念がなくピュアであり、性格の良さが現れている。ヴァイオリンは廣澤氏の「声」のような役割を果たし、自分の気持ちや人への感謝を表す手段だと述べている。

4.2.3 曾我部千恵子氏

曾我部智恵子氏は、ヴァイオリンの教育者として現在まで約50年の経験を持つ。今から20年ほど前、廣澤氏が大学生の頃、プロのヴァイオリニストとして活動するための指導を依頼され、約10年間担当した人物である。コンク

ルに出場し、ヴァイオリンを専門としているような人の指導に携わっていた曾我部氏にとって、廣澤氏は初めてのタイプだった。障害がない人と変わらない基礎練習と教育を施し、日々の動作や言葉をよく観察し、何が出来て何が出来ないのかを探りながら指導を行った。

特に、何が理解出来るかを知るため、字はどれくらい読めるか、話すことはどれくらい出来るか、音感や指先のコントロールはどの程度か、どのような曲ならば弾きこなせるかなどを探ることは時間をかけ、信念を持って臨んだ。選曲は出来るだけ本人の希望に合わせるようにしていたが、廣澤氏の場合、次々と演奏本番の機会が与えられたことにより、各々の場面、場所、時間などに合わせた選曲が難しかったと言う。また、学習障害と聞いていたので、関連する本をたくさん読み勉強した。とは言え、人間は障害の有無を問わず、絶えず変化するものであり、「彼は……である」とレッテルを貼ることはできないと考えた。

曾我部氏は、現在も指導者として活躍しているが、相手が人間である以上、マニュアルや万能な技のようなものは存在せず、指導は未だに模索の連続であると言う。指導者には人間を見る力、見抜く力、相手の立場になり自分で考える力が必要であると同時に、それらを学び続ける態度が必要だと考えている。愛情や気持ちは大切だが、音楽やヴァイオリンの知識や技術も不可欠であり、絶えず深く研究しなければならない。自信を持って指導できるテクニックが大切で、自分の持っている全てのものを相手に与える指導を行う覚悟が必要であると言う。

また、自分は先生たるものかという問いを持ちながら、目の前にいる人に向き合い、相手にとって幸せな道を一緒に考えることが必要である。有名になって欲しいという願いではなく、シンプルにヴァイオリンを楽しく弾けるようになったらいいなあという気持ちが原点である。一人一人の性格や置かれた状況に合わせて、

長い時間をかけて寄り添うことは意識しているが、指導者がそれに生きがいを感じ過ぎて、必死になり過ぎるのも良くない。一生懸命やっても上手くいかないこともあるが、出来ることをやってみるだけである。また、障害がある場合は、自分で自分を上手くコントロール出来ない傾向が強く出る可能性があるため、個々の状態をよく観察し、音楽の力を育てるとともに、心身を守ることも必要だ。これらが曾我部氏の指導観である。

5 まとめと考察

6名が行った療育・支援・指導の内容や方法は、各々の立場や役割、廣澤氏と出会った時期などによって異なる。とは言え、これらの人々に共通していたことがあるとすれば、それはどのようなことだろうか。本稿では、広義の2E教育的な実践が行われていたこと、そして障害や人間に対する考え方の2点に焦点を当てる。

5.1 広義の2E教育的な実践

最初に、何らかの障害と優れた才能を併せ持つ人々を意味する2E (Twice-Exceptional) の概念とその教育について述べる。アメリカでは、1980年代以降、2Eである子どもの才能を識別し、伸ばして活かそうとする2E教育の実践が行われている。松村(2021, p.181)によると、広義の2E教育の理念は「才能を識別しない場合も含めて、全ての発達障害児(傾向・未診断も含む)の得意・興味(才能)を伸ばし、活かして苦手(障害)を補う」ことである。

また、2E教育には、以下3つのステップが含まれる：①2E児の存在と、特性を考慮した教育ニーズを認識する、②学習ニーズを最適に支援するために、得意・興味(才能)と苦手(障害)の両方を識別する、③個人の学習特性に応じて指導・学習の方法・内容を個別化・個性化して、得意・興味を伸ばし、活かして苦手を補

う(松村 2021, p.182)。

廣澤氏と歩みを共にした6名は、2E教育を意図した訳ではないが、その実践には上記3つのステップと類似しているところがある。例えば、母親は得手を伸ばすことを意識し、伸びない子はいないと信じて療育した。また、幼い息子の障害のみならず音感の良さや音楽への興味を強みとして識別し、さらに伸ばそうとした(ステップ①と②に該当)。また石井氏は、学校の勉強についていけなかった廣澤氏に出来ること、必要なことは何か考え、学習内容や量を制限しながら楽しく学べるように工夫した(ステップ①-③に該当)。

音楽・ヴァイオリンの指導者たちも、廣澤氏の様子を観察しながら、出来ること・出来ないことを識別、特性を考慮し、丁寧に指導した(ステップ①-③に該当)。梅本氏については、ファンクラブ会長という立場上、3つのステップに該当するかは不明である。しかし、廣澤氏の演奏を評価し、現在まで約16年間、音楽の活動基盤を提供していることは、ステップ②や③に一部該当するとも考えることもできる。さまざまな人々が異なる立場・方法で関わることを示している。

5.2 障害や人間に対する根本的な考え方

2つ目に、広く障害や人間に対する考え方を挙げる。ここでは、一例として、3名の音楽・ヴァイオリン指導者がインタビューで述べた言葉を以下に示す。

「人種の違いや障害の有無は関係なく、お互いに守り合うべき存在である」(松野氏)、「障害の有無などに関係なく、音楽を愛する者として接することが大切である」(菊本氏)、「人間は障害の有無を問わず、絶えず変化するものであり、『彼は……である』とレッテルを貼ることはできない」(曾我部氏)。障害の有無に捉わられることなく、その人を想い、敬意を持って向き合うこと、これが6名の療育・支援・指導に

通底している。

先述の2Eの観点にも関わることだが、松村(2021, pp.177-178)は、「障害は気づかれるが、才能は気づかれない」状態があると述べており、苦手・出来ないことは注目されやすい一方で、得意・好き・出来ることは過小評価され、見落とされる場合がある。強みを識別、評価する姿勢が必要であり、殊に障害を持つ人々については、一層認識されるべきことである。

6名は廣澤氏の様子をよく観察し、本人の好きなこと、得意・長所も見逃すことなく大切に育んだ。ある時点で苦手・出来ないことについては、自己責任論を突き付ける代わりに、時間をかけて一緒に取り組み、共に歩む姿勢を貫いた。インタビュー時の迫力ある語りから、廣澤氏に障害があることや出会った頃の年齢などを問わず、一人の人間として敬意を持ち、出来得る最善を尽くして真剣に向き合ったことがひしひしと伝わってきた。

筆者の目に映った6名は「廣澤氏の学習能力や可能性を信じ、得意・好きを尊重し、それらを引き出し伸ばすため、時間とエネルギーを惜しまずに試行錯誤を続け、最善を尽くした人々」と要約される。このような心構えと態度で療育・支援・指導に取り組み続けること、これこそが鍵であり、本研究の問いに対する答えであるとする。

6 結論

本研究は、発達障害の人々に対する療育・支援・指導の在り方について知見を得ることを目的とし、ヴァイオリニスト廣澤大介氏の事例に注目した。本稿前半では、廣澤氏の生後から現在までの歩みについて、後半では、廣澤氏と歩んだ6名が実践した事柄について詳述し、その6名の歩みを①広義の2E教育的な実践と、②障害や人間に対する根本的な考え方の2点から考察した。

6名は、発達障害について今ほど知られていない時代から、一貫して廣澤氏の学習能力や可能性を信じ、引き出し、伸ばすことを目指した人々であった。また、障害ゆえに苦手・出来ないことのみならず、好き・得意なこと・長所などの強みを尊重する姿勢が共有されていた。

親や教師など周囲の人々が、障害や人間というものをどのように捉えているかによって、療育・支援・指導の方向が決定づけられることを示す事例である。

【謝辞】

廣澤大介様、稲光宏子様、石井守様、梅本哲世様、松野迅様、菊本恭子様、曾我部千恵子様にご多大なるご協力を頂きました。また、矢野宏様には、新聞記事を提供して頂きました。皆様のご支援に心より御礼申し上げます。

【付記】

本研究はJSPS科研費（課題番号：19H00604）の助成を受けたものです。

【引用・参考文献】

- 松村暢隆(2021)『才能教育・2E教育概論—ギフトエッ
ドの発達多様性を活かす—』東信堂。
楊一凡・井澤信三(2017)「知的障害特別支援学校教
員を対象としたサヴァン症候群に関する調査研究」
『兵庫教育大学学校教育学研究』第30巻, pp.167-
172.

【新聞・ウェブサイトなど】

- 関西テレビ(2009年12月15日放送)「発達障害のヴァ
イオリニスト」。
新聞うずみ火(2008年2月号) pp.2-5。
DAISUKE通信(2001-2016年に発行したニュースレ
ター No.1-26)。
廣澤大介ホームページ[https://daisukehirosawa.word
press.com/fanclub/join-us/](https://daisukehirosawa.wordpress.com/fanclub/join-us/)(2022年1月4日アク
セス)。